

幻魔大戦 5

平井和正



角川文庫 4709

げん ま たいせん
幻魔大戦 5

ひら い かず まき
平井和正



角川文庫 4709

昭和五十五年九月二十日 初版発行
昭和五十五年十二月十日 四版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二丁目十三番三

電話東京二六五—七一一(大代表)

二一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——大日本印刷 製本所——本間製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします

定価はカバーに明記してあります

Printed in Japan 0193-138319-0946 (0)

幻魔大戦 5

平井和正



角川文庫 4709

渋谷駅前の雑踏を歩く東丈は、学生服姿でもありまったく目立たない。中学生のように小柄で平凡な少年に見える。

しかし、その黒瞳の輝きは、視線を止めた者に小柄な少年が並みはずれた迫力の持主であることを知らせるものであった。黒々とした瞳は光を吸収し、何百倍にも増幅して送り出してくるようだ。

丈は見る者をはっと瞠目させ、気圧された感じを与える雰囲気を持っていた。しかし、漫然と見過す、節穴のように瞳孔の拡散した目には、その平凡ならざる印象は映じてこない。むしろ、丈の連れである高校生の美少女たちに目を惹きつけられるだろう。

どういうわけか、最初に丈に近づいて帰依者となり、側近となった少女たちはいずれも人目に立つほどの美少女である。あるいは丈の精神波を傍で受けているうちに、美少女に脱皮してしまつたのかもしれない。いずれも顔色は新鮮な花のようであり、目が明るく活きている。繁華街に集まる少女たちが、顔色悪く、どろんと死魚のような腐った目をしているのとは対称的であった。目立たないようだが、丈には、ある種な粗暴性格者の若者たちが電流を通じられたように触発させられるものがある。そうした人間にとり、丈は眩しいほど刺激的なのだ。

丈には圧倒的な気力がある。時としてその高圧の「力」が、黒い瞳にみなぎりあふれてくることがある。それが無意識のうちに相手を挑発ちょうはつすることにもなりかねないのである。

渋谷駅の構内の雑踏の中で、同級生の井沢郁江いざわいくえをつれた丈は、渋谷は初めてという相手と待ち合わせていた。

二人とも小柄だが、郁江はやたらに愛くるしくて極端に目立つタイプである。とくに私服を着ている時は、男どものちよっかいが多くて新宿や渋谷のような盛り場は気詰りだという美少女であつた。

駅構内はひどく埃ほこりっぽく異臭が漂い、絶え間ない喧騒けんそうで充滿していた。あらゆる年齢層に属する男たちが、郁江の可愛い顔にねっとりした視線を投げて通る。十代から七十歳を越えた年寄りに至るまで、その意味するところは同一であつた。

もし、郁江がテレパシストだったら、山猫やまねこのように逆毛を立てて瞋恚しんいを発するだろう、と丈は考えていた。世の男たちが、女性の浄不浄を問わず、内心に秘めている貪婪どんらんと欲望は、正視に耐えがたいものがあるのだ。

もちろん、丈自身の裡うちにも、彼らと等質のどろどろした情念が存在する。だからこそ、相手の目付を見ただけで、その想念の内容までわかってしまうのだろう。丈の遠感てれパシーは軽微なもので、ルナ王女のようなエックス線まがいみちこの冷徹さではない。

しかし、もし連れが姉の三千子みちこであつて、その種の目付を向けられれば、唾つばを吐きかけたくな

るであろう。それだけ三千子は丈にとり、神聖不可侵のものであった。

男たちの淫猥な意識に心を向けていると、虫歯の腐臭のようなおぞましいものが、心に染みついてくるような気がする。ある種の人間の心は汚物溜である。物凄い腐臭をまきちらして通るさまを見ると、苦しい唾が頬の内側に湧いてくる。いわゆる虫唾が走るというものであろう。

心が生理的な拒否の想いでいっぱいになってしまふのだ。

丈はまだ若くて純粹であり、わかつているようでも、不浄の許容度はきわめて低かった。不浄な人間には堪えられない。忌わしい化物を叩き潰したいという衝動がむらむらと衝きあげてくる。丈には不可視の巨大な“力”の兵器庫が秘められているだけに、身が凍るような思いを味わわねばならなかった。

丈が、その凶暴な衝動を解放すれば、惨事は必至だからだ。

男たちは通りすがりに、意識の中で郁江の衣服を剥ぎとり、彼女の白桃のような肉体を指や口や陽物で克明に犯すのだ。丈にとって不快なのは、そうした淫猥な波動に汚染されて、丈自身、郁江を見る目が汚れているのに気づくからだだった。

男たちと同じような目付で、彼女を見ているのではないかと気になった。丈自身、貪婪な欲望が欠如しているのではない。愛くるしい郁江に対して丈がなにも感じていないといえ、もちろん偽りである。

久保陽子や平山圭子たちと比べて、井沢郁江は明白に丈の欲望を目覚めさせるところがあった。

郁江自身が丈に対して、特に挑発的なわけではない。白桃のように瑞みずしい肉体を持つてはいるが、ごく無邪気である。丈に男性を意識している気配はない。ペットが主人にすり寄るような、意識しないインフアントな媚態があるだけだ。しかし、それが丈を妙に刺激するのだった。

“幻魔”によって貪り喰らわれ、皮一枚の下におぞましい化物を秘めていた、かつての恋人沢川淳子の記憶はいまだに生々しく、丈は女性に対しておのずと忌避的な精神状態にあるのだが、正常な若い男性としての性的ポテンシャルまで失ってしまったわけではない。

頭でこそ、性的意識を克服すべきだと考えてはいるが、現実を強引に従わせることはできない。いかに強大な超常能力を所有しているところで、己れの欲望までねじ伏せてしまうのは不可能である。自分で自分がどうにもならないのだ。

井沢郁江のとてつもなく可愛い顔を見ると、心が安定を失い、頼りなくざわめきだす。恋愛感情だとは思えない。しかし、性的欲望の対象であるだけではない。丈はいつも困惑し、努めて郁江と二人だけになる機会を避けるようにしていた。

今日も岩田邦子や久保陽子に参加できなくなり、気がつくとも丈は郁江と二人きりで渋谷駅構内に取り残される破目になったのだった。

郁江は至極、無邪気である。時折、甘えるように媚態を示してすり寄ってくる。陽子や邦子がいれば、耳たぶを引っ張られてたしなめられるのだが、うるさ方がいないので今は伸びのびと振舞っている。

本人は意識的でなくても、傍^{はた}の目というものがある。高校生男女がいちゃついていると見えるかもしれないのだ。退けようとは思うが、面と向って注意しにくかった。本人に底意がないだけになおさらである。

丈はさりげなく、郁江との間隔をあけ、保持しようとするのだが、彼女は気付かず、間を詰めてくる。郁江は丈を崇拜している。性的意識が稀薄だから、気易く丈に近寄ることが可能なのだ。他の少女たちは遠慮もあるが、郁江ほど無邪気でないともいえるであろう。

「ちよつと待っててくれ。新聞を買ってくるから」

丈は一計を案じ、郁江をその場に残して売店を捜しに行った。郁江から離れるのが目的だった。GENKENオフィスに電話をかけ、身替りをよこしてもらおうという腹だった。郁江には悪いが、丈にも堪えがたいということがあったのだ。

オフィスには幸い人手が沢山あって、すぐに交替要員をよこすという返事だった。

「東先生が、わざわざ駅までお出迎えにいらしてるとは知りませんでした。そうまでなさらなくともよろしかったのに……」

電話に出た女性が恐縮していた。最近オフィスの常連になっている保母の菊谷^{きくたにあきこ}明子らしい。郁江などはいまだに丈を東君と呼んでいるが、近頃では先生呼ばわりされることも多い。オフィスの後援者である平山圭子の父親が先生と呼ぶのが影響している。

旧知の郁江らが「東君」と呼ぶと、むしろ奇異の目で見られるほどだ。しだいに非難がましい

視線にさらされるようになったので、郁江以外は「先生」派に転向してしまった。郁江だけは平気でいまだに「東君」と呼んでいる。傍の目をあまり気にしないからであろう。

丈自身はどう呼ばれても気にしない。先生呼ばわりも一時は気にしたが、諦めてしまった。呼びたい人間たちといちいちいい争っている煩には堪えられない。平山圭子の父など先生をいくら止めさせようとしても無駄で、結局、「先生」が定着してしまったのだ。

「先生」と呼ばれる身ではないが、そう敬称したい人々がいるからには仕方がない。向うは揶揄が目的ではないからだ。

構内の売店で夕刊を買い、郁江の待つ場所へ戻って行こうとした丈は異変に気付いた。郁江のいたあたりにセーラー服の女高生が六、七人かたまっていて、郁江の姿が見えない。いなくなったのではなく小柄な彼女は、女高生の人垣によって隠されてしまったのである。

視力のいい丈は、すでに女高生たちが、郁江の知り合いなどでないことを見抜いていた。雰囲気がるで違う。態度も服装も居汚く崩れている。清潔感が欠如しているのだ。

通りすがりの人間には、知り合いの女高生がたむろしていると見えるかもしれないし、彼女らも表面的にはそのように振舞っている。

一九六七年には、まだ「スケバン」という言葉は一般化されていない。しかし、内容は同じである。粗暴なタイプの非行少女グループであり、カミソリなどの凶器を所持している点もまったく変りない。風俗的に多少、「洗練度」が不足していたかもしれない。アフロ・スタイルやカー

リー・ヘアの奇抜な髪型、足首まで届くぞろりとした制服のスカートはまだ一般に定着していない。しかし、彼女たちが男顔負けの凶暴さと陰湿さで彩られた非行少女グループであることは、なんら変りはなかったのである。

丈はあわてずに、女高生の集団に向って近づいて行った。郁江が非行少女グループに目をつけられるのは珍しくないようだ。負けん気で可愛すぎるのが、闘争的タイプの少女たちに反撥を呼ぶのであろう。

丈が接近するのを動物的勘で悟ったのか、非行少女たちは半円型に開き、丈を迎えた。ぎらぎらと動物的に底光りする七、八対の目が丈の全身に灼きついてきた。敵意と興味がないまぜになった目付だ。

丈の全身から発散している波動を、キャッチする感覚はまさに野獣的な鋭さであった。取り囲まれていた郁江はさほど怯えてはいなかったが、さすがに丈を見て安堵感に顔がほぐれた。丈が帰ってくるのを知っていたから、簡単に謝まらず、突張っていたのであろう。

「東くーん……」

と、郁江が呼んだ。非行少女たちが嘲笑に顔を歪めながら、郁江の口真似をした。

「東くーん、どうしたのよう。遅いじゃないのさあ……」

喉に白い包帯を巻いた女高生が嘲り声でいい、非行少女たちが笑う。異常に大きな瞳をした少女であった。しかし瞳の色は暗く、底がないように虚無的で無表情だ。日本人放れした顔はいく

らかフランス製の陶器^{とうき}の人形に似て、エキゾティックだ。髪はナチュラル・ウェーブでもじゃもじゃにもつれている。いわゆる雀^{すずめ}の巣スタイルだ。

丈は無言で、黒い瞳を頭株の少女に据え、きらめかせていた。虚無的な瞳の少女は圧迫感が不快だったのだろう、わずかに血の色を顔に刷^はいた。怒気が顔をこわばらせる。

「お兄さん、どういう風^{ふう}？ まともにガンつけちゃってさ」

と、少女は低い恫喝^{どうかつ}的な声でいった。脅しには慣れているのだろうが、作り声だ。

「お兄さん、あんた、この突張った娘^この連れなの？」

丈はやはり無言でうなずいた。郁江が非行少女たちの集団の中から駆けだしてきた。少女たちが急いで攔^{つか}まえようと手や足を出したが、間に合わなかった。虚を突かれたというののかにかしら妙にタイミングがはずれてしまい、力なく手が垂れさがる。

非行少女たちはきよんとして、丈と郁江を見ていた。力いっぱい空振りしたあとの、間の悪い表情をしていた。

「東君、この人たち怖いよ。いきなりあたしの鼻をそぎ落してやるっていうんですもの。びっくりしちゃった……そんなこといわれたの初めてだわ」

郁江が丈の腕につかまり、背後に身を隠すように廻りこみながら告げた。

「なんだか変よ、この人たち。理由もないのに、いきなりまっすぐやってきて取り囲むんだから……一度も顔見たことがないのよ」



非行少女たちは肉食獣の群れのように、丈と郁江を包囲した。男など怖れていないことを証明したがっていた。

頭株の少女の手には安全カミソリが把^{つか}まれていた。虚ろな大きな瞳が虚無的に丈を見詰める。

「あんたの佳^{はく}いお面がだいなしになってもいいのかい？」

彼女はしゃがれた声でいった。

「二目と見られなくなるよ。鼻が失くなった人間の顔って化物面だよ。せつかくいい男なのに気の毒だね」

「そんなこと、あんたにできっこないわ！」

と、向う気の強い郁江が叫んだ。

「あんた、この人をだれだと思ってるの？ 今のうちにやめといった方がいいんじゃない？ 天罰^{てんばつ}がくだるんだから！」

「天罰だって？ どういうことさ？」

意表を衝かれたように虚ろな瞳の少女がいった。非行少女の配下たちがいっせいにざわめく。丈の正体をいい当てようとしてささやきあっているのだった。魅^みせられたように丈の横顔に見入っている少女もいる。

「知らないね、どこのなに様だか……」

頭株の少女が呟^{つぶや}いた。この大都会には非行少年グループが無数に存在する。丈がどのグループ

にあてはまるのか、一応検討したのであろう。

「あんたたちにはわかんないだろうけど、彼は偉大な力を持っているのよ。いいこと、よく聞きなさい！ 彼はこの乱れた世を救うべく天命を帯びて地上に下った方なのよ！ あんたたちの頭では、なんのことかわからないだろうけど、彼の神聖な体に出してごらんさい。たちまちその手は腐れ落ち、体は萎えしなびて、しわくちやの年寄りになるのよ！ それが天罰だわ！」

郁江は胸を張り、堂々としていった。

「あんたたちも早く改心するといいわ。さもないと取り返しをつかない悲しい目にあうかもしれないわよ！」

「彼、生神様かなにかなの？」

と、非行少女の一人がおずおずと尋ねた。丈に尋常ならざるものを見出して、不審を覚えていたのだろう。

「そうよ。彼は物凄い力を持ってるのよ」

と、郁江が大威張り^{いば}でいう。

「人の心の中がみんなわかつちやうし、手を触らないでもものを動かしたり、ジェット機より早く空を飛べるのよ。わかる？」

「うわあ、凄い。それじゃ、スーパーマンじゃん?!」

と、非行少女たちは嘆声をあげた。

「そうよ。自動車だって、機関車だって念力で持ち上げちゃうんだから！」

郁江は調子に乗り、その目で見たかのようにまくしたてた。

「念力って本当にあるんだってよ。うちのおばあちゃんがいった。行者が掛声かけると大岩が割れたり大木が倒れたりするんだって……念力で呪のろわれると、元気な人でも一晩でコロッと死んじゃうんだってよ」

非行少女たちは仲間の説明を聞き、すっかり闘志を失くして、畏敬の目で丈と郁江を見比べていた。

「彼は優しいいい人だから、他人を呪い殺したりしないわよ。だけど力はもっと凄いわ。本当にイエス・キリストみたいな人なんだから！」

「へえ……じゃ、本当に生神様じゃん？　そういえば、彼、ちょっと変ってるもんね。なんかこう、目なんかキラキラして、スカッとした感じで、他の野郎と違ってるよね。生神様なんだったら、神々こうごうしくてさ、彼なんて呼んじゃいけないのかもね」

「なんだか、力が抜けちゃって、変だなあって思ってたのよ。ファイトないのよね」

「あんた、ちょっといい男だとすぐテレンとなってヨダレこぼすじゃん」

非行少女たちは口々にいった。もはや敵意を失ってしまったようであった。

その間、頭株の非行少女は虚無的な瞳を瞬きもさせずに丈の顔に据えていた。獣性というより

は、妙に虚ろで危険な雰囲気を持った少女であった。

「そうすると、あんた、イエス・キリストみたいな偉大な生神様で、死にかけた病人も治せるっていうのかい？」

と、彼女は一人だけトーンの異なる暗い掠れ声で尋ねた。

「彼にはなんだってできるわよ」

郁江が熱っぽくいった。

「あんたたちも一度彼の講演を聞きにくるといいわ」

「へえ……講演っていうと、講堂なんか人にいっぱい集めて喋る、あれ？」

「当り前じゃん。でも、面白そうだね……彼が本当に喋るんなら、聞きにいつでもいいわ」

「彼、名前なんていうの？」

と、非行少女たちは大いに関心を示した。

「ちよつと待ってね。講演会のビラ持ってるから、今あげる」

郁江は紙袋から取り出したパンフレットを配り、非行少女たちはいっせいに手を出して奪いあった。郁江は才能豊かな宣伝マンの素質を発揮していた。

「へえ、そうかい……あんた、新興宗教の教祖なのかい……」

一人パンフレットに手を出すことなく、頭株の非行少女がぽつりといった。

「あんた、本当に病人を治せるのかい？」